「アジアの中の日本文化」研究センターの活動には二本の柱があって、一つがこの『JunCture』の発行であり、もう一つが年に一度の国際シンポジウムの開催である。

本年度のシンポジウムのテーマは、「表現の不自由」だった。このテーマの今日的な意義は、幸か不幸か、ことさら説明しなくとも理解されるだろうと思う。現在の日本の不穏さには、気が重いといっているだけではすまない危機感を覚える。しかも国と個人という枠組みではとてもとらえきれない、集合化した個人から発せられる圧力が重なりあっているように思われる。シンポジウムの概要は事業報告欄でご覧いただければと思うが、国家によって制度化された検閲の問題だけでなく、人やメディアの自主規制について、過去と現在を繋ぎ東アジアの関係の中に日本を置いて再考するという機会をもった。六つの報告は非常に緻密かつ刺激的で、議論の交差点では様々な論点が縒り合わされた。自主規制には、国家の論理だけではない資本の論理が大きな力を及ぼしていること。消費の論理は、またそれと異なる動きをみせ、こと現在についていえば、経済的な消費だけではない情報の消費において、さまざまな規模で集団が形成されていること。規制は上からなされるだけではなく、ある種の「良識」の形をとって、規制を肯定する「空気」が生み出されていること。規制の具体的な基準やプロセスの不透明さが、自主規制を強化するということも共通して論じられた。語ることを封じられた〈事件〉の内には当事者がいて、当事者が生き延びるために、記憶が封じられることもあること。一方で、記憶することの困難さとともに、忘却の彼方から〈事件〉を再びたぐり寄せる試みもあるということ。問題を構成する細かな編み目が浮かんでくる非常に濃密な二日間であった。

『JunCture』では、有難いご縁をいただいて、「表現の不自由」に挑んでおられる安世鴻さんの写真を巻頭に掲げることができた。たいへん嬉しく思う。特集は、シンポジウムで、メディアや表現の現場がある方向に規制されたり封じられたりする息苦しさに向かい合うことにしたので、情報が不規則に動いていく様に目を向けたいと考えて、「触発するメディア」とした。裂け目やずれは常に発生しているはずで、それぞれの〈事件〉をめぐってつくられていく文脈は一筋にまとまるものでもない。そうした企画者の意図に見事に応えてくださった六人の執筆者のみなさんに、深く感謝申し上げたい。情報の継ぎ目に、人の姿が見えている。〈事件〉の意味は、伝えられ受け取られ、また伝えられていく。意味が媒介される過程に目をこらすことは、出来事の可変性を呼び込むと思う。いつも事態は動いている。そして、扇情的な意味の奪い合いがあるときこそ、その場の際だった対立が何を見えなくしているのかということを考えたいと思う。

レビューを寄稿してくださったみなさん、研究論文を投稿してくださったみなさんにも、心より感謝申し上げる。日本文学、日本史、日本語、映画、アート、今号も多様な領域の論考が揃った。

デザインをしてくださった金武智子さん、英語のチェックをしてくださった垣原智子さん、前号に引き続き編集作業を手伝ってくださった大山僚介さん、岡英里奈さん、全ての方のお名前を挙げることはできないが、ご協力くださったみなさんに、感謝を申し上げたい。

最後に読者のみなさんへ。『JunCture』第六号をお届けします。ご高評いただければ、幸いです。

（飯田祐子）